

青森市方言の動詞化接尾辞「ガル」¹

大槻知世

キーワード： 青森市方言 津軽方言 動詞化接尾辞 「ガル」

要旨

本稿では、青森市方言における動詞化接尾辞「ガル」について主に次の2点を報告する。すなわち、青森市方言の「ガル」は、第一に、共通語の「がる」よりも幅広い範囲の形容詞に接合すること、第二に、青森市方言の「ガル」による派生動詞は元の述語よりも結合価が増えると思われること、である。さらに、「ガル」の中心的な意味には心情を言動で外面に表わすという動作性があるが、これが平安時代仮名文学で特に隆盛した「がる」の古態残存ともとれることを述べる。

1. はじめに

共通語（現代日本標準語、東京方言と同義で用いる）の「さびしがる」「悲しがる」における「がる」と同じく、青森市方言にも動詞化接尾辞「ガル」（これ以降便宜的に「ガル」と表記するが、音声的にはいわゆる鼻濁音の「ガル」[ɲaru]である）がある。ただし、その接合する相手に注目すると、共通語の「がる」がある種類の形容詞と一部の名詞に留まるのに対して、青森市方言の「ガル」はより多くの種類の形容詞と一部の名詞に接続することができる。

2. 考察対象と調査について

2.1 対象言語

考察対象は青森市の津軽方言（以下青森市方言）である。津軽方言自体は青森県西部で主に話されており、分類上は日本本土方言のうち東日本方言、さらに東北方言のうちの北奥方言（主に青森・秋田北部・岩手北部の方言）に属する。

2.2 調査方法

本稿のデータは概ね筆者（20歳代女性。言語形成期以降19歳まで青森市）の内省に基づく。「ガル」が接合できる形容詞を採集するために『三省堂国語辞典』第五版を参照した。また必要に応じて、筆者の内省による作例をもとにインフォーマント（40歳代女性。言語形成期以降

¹ 本稿は日本方言研究会第95回研究発表会（2012年11月2日富山大学五福キャンパス）における同タイトルの発表原稿を一部修正・加筆したものです。研究・発表にあたって、国立国語研究所『危機方言調査』のための若手研究者育成プログラムより研究補助費を受けました。また、研究発表会では多くの方々から様々なご指摘を頂きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

24歳まで青森市、うち4年間は弘前市²、24歳以降現在まで青森県外)への聞き取り調査を行い自然さを判断してもらった。出典の無い例文は、特に断りのない限り筆者の作例である。

3. 青森市方言の「ガル」

3.1 「ガル」の接合する語幹

青森市方言の動詞化接尾辞「ガル」は、共通語の動詞化接尾辞「がる」と同様に形容詞語幹や名詞などを語幹として接合する。

共通語の「がる」の接合する語幹は、品詞で分類すると主に三つに分けられる。すなわち、(a) 形容詞語幹(「うれしがる」)、(b) 形容動詞語幹(「あわれがる」)、(c) 名詞語幹(「粋がる」)である。このうち、(c)は生産的ではなく、青森市方言と共通語で大きな差異は認められないため、(a)と(b)を考察対象とする。なお、本稿ではいわゆる「イ形容詞」(「うれしい」と、「形容動詞」あるいは「ナ形容詞」(「あわれな³」)をまとめて形容詞とする。

3.2 青森市方言の「ガル」が接合する形容詞について

3.2.1 接合する形容詞(1): 共通語との比較において

青森市方言の動詞化接尾辞「ガル」は共通語の「がる」より多くの形容詞に付いて動詞を派生する。例えば「ガル」を用いた次の表現(1-5)は共通語では成立しにくいことが筆者による聞き取り調査⁴で分かっているが、青森市方言では自然に成立する。

- (1) ハナコ ゴーヤーバ ニガガッテラ [苦(にが)ガル]
(花子がゴーヤーのことを苦いと思っている様子をしている)
- (2) タロー トーガラシバ カラガッテラ [辛(から)ガル]
(太郎が唐辛子のことを辛いと思っている様子をしている)
- (3) タロー ハナコバ スギガッテラ [好きガル]
(太郎が花子のことを好きである様子をしている)
- (4) ハナコ タローバ キライガッテラ [嫌いガル]
(花子が太郎のことを嫌いしている様子をしている)
- (5) タロー イーキガッテラ [~気ダ] (※「~」には形容詞の他、動詞も生じうる⁵)

² 江戸時代に津軽地方を治めた津軽藩の都。弘前市の方言を津軽方言の標準語とみる話者も多い(佐藤2003: 3)。

³ ちなみに、次例の通り、津軽方言では「形容動詞」の終止形と連体形はともに「~ダ」である。このため、これ以降「形容動詞」の代表形として「~ダ」の形を採る。また、カタカナ表記(「~ダ」)かひらがな表記(「~だ」)かで揺れることがあるが、こうした表記の別は議論に影響しないため、特には統一しなかった。

(ア) ハナコ キレンダ (花子は綺麗だ) [終止形]

(イ) キレンダ ハナコ (綺麗な花子) [連体形]

⁴ 東京都生え抜きの20歳代女性1名に散発的に行った。

⁵ 動詞の例は次の(ウ)を参照されたい。例(1)および(4)の「形容詞-ガル」と(ウ)の「動詞+気-ガル」は、いずれも同様に述語としてはたらいており、語幹が形容詞なのか「動詞+気ダ」なのかによる差異はない。よって「動詞+気ダ」全体を一語の形容詞と同等に扱っても差し支えないと思われる。

(ウ) ハナコ デガゲルキガッテラ (花子は出かける様子をしている)

(太郎は得意気な様子をしている)

さらに、筆者の内省では語幹が複合語の形容詞の場合にも接合することがある (6)。

(6) ハナコ タローバ ソゴイジワルガル [底意地悪い]

(花子は太郎のことを底意地が悪いと思っている様子である)

寺村 (1988 : 140) は、感情表現を、動的事象を客観的に描く動詞表現と、静的事象を主観的に規定する形容詞表現 (ひいては名詞表現も) とから成る連続体であるとした。さらに形容詞表現は、感情状態の表出 (「コワイ」)、感情的判断 (「オソロシイ」)、そして属性規定 (「丸イ」) に三分される。寺村の分類に倣うと、順番が前後するが上の (3 - 4) は感情的判断の形容詞、(1 - 2) は属性規定の形容詞、(5) は名詞表現ということになる。感情状態の表出を意味する形容詞には共通語の「がる」も青森市方言の「ガル」も接合できが、青森市方言の「ガル」は、共通語の「がる」が接合できない感情的判断の形容詞や属性規定の形容詞、そして一部の名詞表現にまで接合することができる。

ただし、「ガル」は形容詞であれば何にでも接合できるというわけではない。寺村 (1988 : 160 - 172) は属性規定の形容詞をさらに次の三つに分類している。すなわち、何かに対する性状・態度 (XハYニ〜ダ : 反対、賛成など)、相対的性状規定 (既定の仕方が相対的なもの : 大小、長短など)、絶対的性状規定 (「何に対して」などの補語が不要 : 丸い、四角いなど) である。このうち、絶対的性状規定には青森市方言の「ガル」が接合しにくい⁶。

また、これ以外にも、方言として定着していない四字熟語が語幹である場合には、(7) のように「ガル」が接合しにくいという傾向が現時点で指摘できる。

(7) *有名無実ガル、*利己主義ガル

本節では共通語との比較を念頭に置いて「ガル」の接合しうる形容詞を見た。その結果、青森市方言の「ガル」が共通語の「がる」より多くの形容詞に接合しうることを確認した。

3.2.2 接合する形容詞 (2) : 方言形に着目して

本節では、青森市方言の内部において「ガル」が造語力を発揮している例を確認する。次に挙げる例 (8 - 12) では、「ガル」は方言固有の形容詞にも接合している。例 (8 - 11) の方言による文の表記と共通語訳は、松木 (1977) 『弘前語彙』⁷からそのまま掲載する。例 (12) は筆者の作例である。

(8) エサダバ イダワシガラネエデ カネカゲダнда。 [イダワシガル] (43 頁左)

(〈新築の〉家には惜しがらずに〈ずいぶん〉お金をかけたんだよ。)

⁶ なお、共通語の「がる」が相対的性状規定の形容詞に接合できないのに対して、筆者の内省では、例 (エ) のように、青森市方言の「ガル」は接合できる。この点に関して、青森市方言の「ガル」は、身体感覚を通じた実感を伴うという意味の身体性の有無が重要なのではないかとのご指摘を上野善道先生から頂いた。

(エ) ハナコ センセーノ ハナシバ ナガガル (花子は先生の話の長いと感じている様子である)

⁷ 竹田晃子先生のご教示のおかげで、弘前市の医師であった松木明による『弘前語彙』を参照することができた。もちろん本稿の考察対象は青森市方言である。しかし、脚注 2 で述べたように、弘前市方言が伝統的に津軽方言の「標準語」と見なされてきたことと、方言固有語の形容詞においては青森市と弘前市で差異はみとめられないことから、方言固有語の調査のために『弘前語彙』を参照することに問題はないと思われる。

- (9) アレア ウダデガテ ミデラウジネ、アオグナタンダ。[ウダデガル] (49 頁左)
(あいつは気味が悪がって見ているうちに、まっさおになったんだよ。)
- (10) バゲネナタケア オコナガテ エサ モドレヘナネエ。[オコナガル] (73 頁左)
(晩になったら怖がって家に帰れないんですよ。)
- (11) メグサガテ フトリコデ センセエノドサエテ モノシャベレネエノシ。[メグサガル] (459 頁左)
(恥ずかしがって一人で先生のところへ行ってものをしゃべれないんですよ。)
- (12) タロー フロサ ハイッテ アズマシガッテラ⁸ [アズマシガル]
(太郎は風呂に入って気持ちよさそうにしている)

後の 3.3 節の内容を先回りして述べると、「ガル」の複数ある意味のうち、青森市方言において主要な意味は「そのように思っているということを言動によって外面に表わす」である。実際に、共通語訳から明らかのように、上の例のいずれもその意味で解釈される。

以上のように、「ガル」は方言固有語とも結びつき、方言内部において高い生産性を有していると言える。

3.2.3 接合する形容詞 (3) : 外来語に着目して

個々の例の自然さの判断において年代差・個人差が比較的大きくなることが予想されるものの、筆者の内省では次の (13 - 16) のように外来語の形容詞にも「ガル」は接合することができる。

- (13) タロー イチネンセーバ ミデ フレッシュガッテラ
(太郎は一年生を見て新鮮だと思っている様子をしていた)
- (14) ハナコ ベンキョーシテラバッテ ナーバスガッテラ
(花子は〈試験〉勉強をしているものの、不安に思っている様子をしている)
- (15) タロー クジ アダッテ ラッキーガッテラ
(太郎はクジが当たって幸運に思っている様子をしている)
- (16) [例 (15) の直後] ハナコ タローバ ミデ ナイーブガッテラ
(花子は〈実はハズレなしのクジに喜ぶ〉太郎を見てナイーブだと思っている様子をしている)

外来語に接合する場合も、その多くは「そのように思っているということを言動によって外面に表わす」という意味による解釈が他に先行すると言える。しかし、必ずしもそうではない場合もあり、たとえば (16) のような文脈無しで、「ナイーブガル」だけを聞いた瞬間、「ナイーブなふりをする」という解釈も、「だれかをナイーブだと思っていることを外面に表わす」の解釈とほぼ同時に想起されるように思われる。

このように「外来語の形容詞 - ガル」の典型的な意味が一つに定まりにくいのは、「外

⁸ 「アズマシイ」を考慮に入れたのは、久野眞先生のご指摘による。

来語の形容詞 - ガル」が一語として十分に意識に定着しておらず、その場限りの nonce word のような性質を持っていること、また「ナイーブ」のように外来語の意味が曖昧な場合が少なくないことによるのかもしれない。同じように、年代差や個人差によって自然さの判断に差が付きやすいと予想したのも、外来語は年代・個人による定着の度合いのばらつきが他の語に比して顕著であると考えられるためである。

しかし、現時点では複数の話者による量的なデータに乏しいこともあり検証できないため、外来語の形容詞に関する言及はここまでに留める。

3.3 「ガル」の意味

接尾辞「がる」には、共通語・青森市方言ともに①「そのように思っているということを言動によって外面に表す」の意を表すもの（「寒がる」）、②「そのように思う、そう感じる」の意を表すもの（「(内心) うれしがる」）、③「そのようにふるまう、そのようなふりをする」の意を表すもの（「強がる」）、の三つがある（『日本国語大辞典』『新明解国語辞典』など）。ただし、①は心理状態を外面に表出するという点が②と異なっている。

このうち、青森市方言では①「そのように思っているということを言動によって外面に表す」が中心的である。先の例 (3) の「好きガル」の意味は、「好きなふりをする」（用法③）ではなく、「好きだということを言動によって外面に表す」（用法①）である（ただし使われる文脈によっては用法②の意味で「好きだと感じるが好意を外面に表さない」とも読める⁹）。

共通語でも用法①が最も典型的とされる（韓 2010 : 275）。しかし、対象の恒常的な性質を描写する属性形容詞（「苦い」「辛（から）い」「綺麗なだ」「優しい」）、およびそれに近い形容詞（「好きだ」「嫌いだ」¹⁰）に「がる」が接合すると、共通語では用法③が優勢になり、一方青森市方言では用法①が優位を保つと思われる。

3.4 「ガル」の人称制限、テンス・アスペクト

ここでは「ガル」自体の統語的・形態的特徴と思われる点を述べる。共通語の「がる」と同じように、青森市方言の「ガル」は主語が1・2人称の時には用いにくい。このため、次の例文は自然さに欠ける。

(17) ??ワ ハナコバ スギガッテラ

(私が花子のことを好きである様子をしている)

⁹ 上野善道先生から、文脈によるとはいえ同一の文 (3) 「タロー ハナコバ スギガッテラ」に相反する二つの解釈：(a) 「太郎は花子のことを好きであり好意を外面に表わしている」(b) 「太郎は花子のことを好きであるが好意を外面に表わしていない」が許容されることの矛盾についてご指摘を受けた。これについては、やはり解釈 (a) を基本としつつ、解釈 (b) を現実には即して精緻化することで説明できないかと考える。解釈 (b) 「太郎は...好意を外面に表わしていない」とあるものの、好意を全く表出していないのであれば、第三者が (3) の文を発することはできない。つまり、太郎が自らの好意を第三者に知られることを意図しているかいないかの違いと考えられる。よって、二つの解釈に次のような修正を加えることで説明することができる。

(a) 「太郎は花子のことを好きであり好意を外面に表わすことを意図している」

(b) 「太郎は花子のことを好きであるが好意を外面に表わすことを意図していない」

¹⁰ 好きである状態、嫌いである状態を表す点で恒常性があり、属性形容詞に近いと考えている。

(18) ??ナ ハナコバ スギガッテラ

(君が花子のことを好きである様子をしている)

ただし2人称主語の場合も次のように単純疑問文(Yes/No 疑問文)では用いることができる。

(19) ナ ハナコバ スギガッテランデネーナ

(君は花子のことを好きなんじゃないか?)

したがって、概ね例文 (20) (= 3) のように、主語が発話行為参加者の1・2人称ではなく、3人称の場合に「ガル」を用いることが自然である。

(20) タロー ハナコバ スギガッテラ (例文 (3) 再掲)

(太郎が花子のことを好きである様子をしている)

また、次の例 (21) には不自然さを表す印こそ付していないものの、「ガル」は (21) のようないわゆる不定形では用いにくい。それに対して、(22) のような過去の「た」相当の「タ」、(14 - 16) や (23) のように共通語「ている」相当の「テラ」や、(13) や (24) のように「ていた」相当の「テダ」という形で用いることが自然である。

(21) タロー ハナコバ スギガル

(太郎が花子を好きである様子をする)

(22) タロー ハナコバ スギガッタ

(太郎が花子を好きである様子をした)

(23) タロー ハナコバ スギガッテラ

(太郎が花子を好きである様子をしている)

(24) タロー ハナコバ スギガッテダ

(太郎は花子を {好きである様子をしていた/好きそうにしていた})

不定形 (あるいは同じ形の非過去形) が現在の習慣や属性を表すと考えると、「ガル」はそうした習慣・属性を表すテンス・アスペクト形式とは両立しにくいことが窺える。

3.5 「ガル」による派生動詞における結合価増加と思われる現象

以上見てきたように、「ガル」は形容詞の語幹に接合して動詞を派生する接尾辞である。ここでは、「ガル」によって新しく派生した動詞は、元の述語に項が一つ (経験者項) 加わる傾向が強いことを示す。次の (25' - 27') の語幹である形容詞は、(25 - 27) にあるように「XハY (述語)」の形で現れる一項述語である。しかし、「ガル」によって派生した動詞は、主格 (通常は無標示である) と対格 (無標示が多いが、標示のある場合「バ」あるいは「トバ」で示される) の二つの項をとる。

(25) ソノダジャレ バカバカシイ

(25') ハナコ ソノダジャレバ バカバカシガッテラ

(花子はその駄洒落を馬鹿馬鹿しいと思っている様子である)

(26) アノヘヤ キタネ

(あの部屋は汚い)

(26) センパイ アノヘヤバ キタナガッテラ

(先輩があの部屋を汚いと思っている様子である)

(27) ソノヘヤ セメ

(その部屋は狭い)

(27) ハナコ ソノヘヤバ セマガッテラ

(花子はその部屋を狭いと思っている様子である／狭そうにしている)

つまり、(25)「ソノダジャレ」、(26)「アノヘヤ」、(27)「ソノヘヤ」のように、もとの述語において主格であった項が、派生動詞による文(25' - 27')では主格から対格に下げる降格を受けていると考えられ、対格で標示される。それと同時に、(25 - 27)では標示されていなかった経験者が、(25' - 27')においては主格に上昇していると言うことができる。このように「ガル」によって派生した動詞は、もとの述語より項が増加すると言える。

しかし、結合価が増えない形容詞もある。たとえば「好きだ」の場合は、次の通り元々項を二つとる(28)。そして(29) (=3)の通り「ガル」が接合しても項の数は二つのままで増加しない¹¹。

(28) タロー ハナコ[ϕ /バ/トバ¹²] スギダ

(太郎は花子のことが好きだ)

(29) タロー ハナコバ スギガッテラ

(太郎が花子のことを好きである様子をしている)

4. 平安時代仮名文学の「ガル」との関連の可能性

青森市方言の「ガル」の中心的な用法①「そのように思っているということを言動によって外面に表す」は、平安時代の仮名文学に多く見られたものの、後に生産力を減退させたときされる「がる」の用法の残存として説明できる可能性がある。古語の「がる」について辞書では次のように説明している。

がる〔接尾ラ四型〕(形容詞や形容動詞の語幹、名詞・助動詞などに付いて) そのように感じる、そのように振る舞うの意を表す。(『小学館古語大辞典』: 421)

『時代別国語辞典：室町時代編二』(393頁)も、「がる」は「そのように感じたり、思ったりしていることが、はたから察知できる程度の状態を呈する」意を表わすとする。つまり古語の「がる」は、動作によって感情・感覚を表出する「動作性表現」(関 1981: 15)をなす。関

¹¹ これゆえ、結合価よりも「X(主格) Y(対格) ~ガル」といった格フレームで考慮すべきではないかというご指摘を佐々木冠先生から頂いた。確かに、(28-29)の「好きだ」のように「ガル」が付いても項の数が変化しない形容詞(しかも頻用語)もあることを考えると、格フレームの方が説明が容易になる可能性がある。

¹² 対格標示が「 ϕ (無標示)」「バ」「トバ」で表される各々の場合において、文のイントネーションは異なるが、ここでは捨象して考える。

によると、動詞化接尾辞としての「がる」は平安時代仮名文学において次のような経緯で用いられ始めた。すなわち、上代の動詞化接尾辞には状態動詞をつくる「ぶ」と動作動詞をつくる「む」があった。そして平安時代仮名文学独自の接尾辞として「がる」が登場し、「む」が結合することのなかった形容詞語幹と結合するのみならず、既に「あやふむ」「ねたむ」等の「む」による派生動詞があるにも関わらず、「あやふがる」「ねたがる」等の動詞をつくり共存させたという（関 1981 : 15）。つまり、平安時代仮名文学の「がる」は動作性がその意味の中核にあり、一時は先在の接尾辞を駆逐しそうなほどの生産力を発揮していた。

例えば「あはれがる」について、亀山（1969）は、状態を表す形容動詞「あはれなり」に対して、「あはれがる」は激しい動作を表す動詞と共起することが多く（「泣きあはれがる」「のしりあはれがる」「言ひあはれがる」）、このため「あはれがる」が身体全体の動きを示しているとする。そしてその動作性は「がる」によるとする。

要するに、この平安時代の「がる」が動作性を残すとともに、方言に取り込まれてなお生産力を保持して、現在の青森市方言の「ガル」になったのではないかと考えられる。近代以前の青森市方言の記録がないため、この推測を証明することは難しいが、管見では平安時代仮名文学の「がる」との関連を否定する積極的な根拠は見当たらない。

しかし、やや異なる別の可能性ももちろん考えられる。というのは、「ガル」の造語力の高さや意味といった特徴が青森市方言に独自のものと思われる¹³ことから、方言内部における発展と考えるのが妥当であるためである。つまり平安時代仮名文学の「がる」の古態がそのまま保存されているというよりも、方言に取り込まれて一層の生産性を発揮し、現在あるような意味を形成してきたという折衷案的な可能性も考えられる。筆者は判断するに足る証拠¹⁴を持たず、先に述べた周圈論的な考え方も否定できないため、ここではこれら二つの可能性を提示するに留める。

5. まとめ

本稿では、青森市方言の動詞化接尾辞「ガル」が共通語よりも幅広く形容詞に接合することと、接合する形容詞にみられる傾向を報告した。「ガル」による派生動詞は、元の述語より項が増える傾向の強いことも述べた。また、検証が必要であるものの、平安時代仮名文学における「がる」との関連も完全には否定できないことを述べた。

参考文献

亀山泰紀（1969）『「あはれがる」と『あはれぶ』』『尾道短期大学研究紀要』18 : 115-131. 尾道 :

¹³ 五所川原市方言（五所川原市は青森市より西に位置する）の母語話者である田附敏尚先生によると、五所川原市方言の「ガル」は青森市方言の「ガル」とは接合する範囲や意味等において異なるそうである。

¹⁴ 検証には中央語（主に京都）の平安時代・室町時代の言語的資料、および青森市のみならず津軽方言の前近代の言語的資料が必要である。後者に関連するものとして筆者が確認した中ではタタリノフの『レキシコン』が最も古いが、同書は厳密には津軽方言ではなく下北方言（津軽地方と陸奥湾を挟んで面した下北半島で話されている）とロシア語の対訳語彙・文例集である上、「ガル」はみとめられなかった。

尾道短期大学.

韓金柱 (2010) 「現代日本語における接尾辞『がる』の意味・用法—様態の『そうだ』と比較して—」『言語・地域文化研究』16: 271-284. 東京: 東京外国語大学大学院.

見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武・中川孝・飛田良文 (編) (2004) 『三省堂国語辞典』第五版 (小型版). 東京: 三省堂.

佐藤和之 (2003) 「I 総論」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫 (編) 『青森県のことば』日本のことばシリーズ2. 1-41. 東京: 明治書院.

関一雄 (1981) 「『かなしぶ』『かなしむ』『かなしがる』小考—中古仮名文学の用例について—」『山口国文』4: 8-18. 山口: 山口大学文理学部国語国文学会.

寺村秀夫 (1982,1988) 『日本語のシンタクスと意味 I』第7刷. 東京: くろしお出版.

中田祝夫 (1983) 『古語大辞典』421. 東京: 小学館.

松木明 (1982) 『弘前語彙』弘前: 弘前語彙刊行会.

室町時代語辞典編修委員会編 (1989) 『時代別国語大辞典: 室町時代編二』393. 東京: 三省堂.

Verbalizing Suffix “-garu” in Aomori-city Dialect

OTSUKI Tomoyo

Keywords: Aomori-city dialect, Tsugaru dialect, verbalizing suffix, “-garu”

Abstract

In this paper, the following two points are reported on the verbalizing suffix “-garu” in Aomori-city dialect (a subcategory of Tsugaru dialect). First, “-garu” in Aomori-city dialect can be attached to a wider range of adjectives, than its counterpart in Standard Japanese. Second, this suffix can increase the valency of its stem, that is, the experiencer of the original adjective can appear as an argument of the derivational verb. Moreover, the suffix “-garu” mainly means that an experiencer shows his/ her own feeling with some motion. This might be preservation of the suffix “-garu”, which had a similar meaning and was widely used in literature in Middle Standard Japanese (ca. 800-1200).

(おおつき・ともよ 東京大学大学院修士課程)

